

「タイ環境学習キャンプ」旅行記 東京経済大学4年/学芸大学サークルちえのわ 柴山真さん

8月9日から16日まで、タイ環境教育キャンプに参加、その旅行記ということでタイでの思い出や環境教育キャンプで得たことなど、思いつく限り書いていきたいと思えます。まず今回、このキャンプに参加しようとした動機ですが、私は大学のゼミでフェアトレードについて勉強しています。フェアトレードとは、発展途上国で中間搾取などによって生活が厳しくなっているカカオやコーヒーの生産者をチャリティーではなく、生産者が自立できるような経済的仕組みで支援しようとするシステムのことを言います。募金を集めて途上国に寄付をするような支援の形では、継続して行うことが難しいですし、途上国は援助金を受け取るだけだといつまでも自立した生活ができない、一過性の支援に終わらないフェアトレードに興味を持って学んでいました。フェアトレードの勉強も、参加者時代から10年以上にわたってお世話になっているサークルちえのわも、活動の根本は「国内・海外問わず、子どもたちが学校に通えて、誰一人疎外されることなく、家族の愛情に育まれながら成長できる社会にするためにどのような活動ができるか」という自分への問いがありました。今回、フェアトレードのスタディーツアーを探していましたが、子どもたちが育つ環境は、日本に限らず世界ではどうあるのかの生身で知りたいということ、そしてサークルちえのわの活動において環境教育の活動をしているということからこれからの活動に活かせればという思いから参加を決めました。



タイ環境教育キャンプの参加者の皆さんは私とご家族で参加されていた中学生の咲ちゃんを除いて6人全員とも中込ミさん繋りの教職員の方で、私から見れば大先輩の方ばかりでした。今回の旅では成田空港を出発して、タイのバンコクに到着、その後は世界遺産に登録されているファイ・カ・ケン野生生物保護区のあるウタイタニ県バンライを中心にまわり、最終日にバンコク市内観光をしました。

出発の日は台風が関西にまで迫っている中での出国となり、台風に向かって進む機内は日本を抜けるまでは大荒れの天候でした。タイのスワンナプーム国際空港に到着後、空港から1時間ほどのところにあるバンコクのラジャバト大学、グランドビューホテルで早速の激辛料理の洗礼を受けました。到着して休息を入れればすでに夕方だったのですぐに夕飯になりましたが、ここではラジャバト大学の副学長の方との会食となり、基本的に全部おいしいのですが、やっぱりこのタイ独特の辛さに慣れるのには時間がかかったのを覚えています。

翌日は朝早くからホテルを出発し、バンコクを後にして専用のバスでパンダキャンプを目指し始めました。出発前には、今回の旅で大変お世話になる若林さんと、奥さんであるエーさんと合流しました。若林さんは長年このタイ環境教育キャンプで現地引率を実施してくださっている方の一人で、バンコクに在住されて20年以上のホタル好きな研究者の方です。

行く道にはパナソニックの看板やファミマやセブン、イオンなどの日系企業の店舗や看板がそこら中にあり、タイ経済の中で日本の影響をかなり受けていることが実感できてとても驚きました(実際に店舗に置いてある品物は日本からの直輸入や、タイ人にアレンジした物など様々です)。途中休憩の道の駅のようなところで、川魚の唐揚げなどをいただいて、寄り道して東南アジアならではの古めかしい市場へ。地元の人たちが食べてそうな天然うなぎや干物、湯豆腐、豆類、中国から輸入したと思われる雑貨などなど雑多な感じがたまらない一日いても飽きない市場でした。さらに道を進み、視界が田園風景だけになってきた頃、ウタイタニ県のバンライに到着、すぐにパンダキャンプに到着、パンダキャンプにおられるご主人のシリポンさん、ポタンさん、高校生のダンくん、中学生のパンダちゃんにお会いしました。この日は移動だけで6時間以上かけて進んだため、とっても夕飯がおいしく感じました。パンダキャンプを管理しているファミリーフォレスト(近隣農民の方が主体)が

日本人向けにアレンジして下さったタイ料理もとってもおいしかったです。

この日の夜は早速、ジャングルの自然観察へ。とってもホテルが美しいそうなので若林さんと共にパンダキャンプから更に奥地の山奥まで荷台に乗り込んで進みました。荷物は少なく、カメラと網とカゴだけで。バンコクの暑さから一転して寒いところでした。若林さんは得意分野でもあるホテルは、着いて暗い登山道を降りた先の川が見えた途端に目の色が変わりました。目の前にはチラチラ、日本とは違って煌々と光るホタルたちが見えたのです。幼虫を手にとっては小さすぎてカメラに写らず、ついに成虫を捕まえてすぐにパンダキャンプに帰りました。キャンプにはとれたてのバナナとココロギらしきおつまみがあり、すぐに晩酌の運びとなりました。夜遅くには甲高い鳴き声が森中に響き渡り、シロアリに羽がついたものが泊まっていたログハウス近くに大量発生していました。虫が嫌いなわけではありませんが、大群がログハウスの中にまで浸食しそうで、恐怖を感じました(笑)。

そこで見たものはその羽アリをこれでもかとむさぼり食べていた「トクエイ」という、これまた30センチ近くはあるであろう赤、黄色の派手なトカゲでした。鳴き声のするトカゲは初めてみましたが、これまた南国サイズだなと思いました。そのトクエイが完璧すぎるくらいに全ての羽アリを食べてくれたおかげで、あれだけ大量発生していた羽アリもものの1時間できれいさっぱりいなくなりました。



翌朝もおいしく朝ご飯をいただきましたが、何よりフルーツが最高においしいのは今でも覚えています。バナナはもちろん、ドリアン、ロンコン、マンゴスチンなどなど、バンコクでいただくより新鮮でおいしいものを沢山いただきました。この日は環境教育のワークショップの日で、地元小学校に通う子どもたちや、地元のカレン族の皆さんをお呼びして、普段授業で教えてもらえない日本の理科実験をエーさん翻訳のもと、それぞれ担当を決めて行いました。1時間目はまだ皆さん初対面ということで、アイスブレイク。担当はしばやまでした。

普段からちえのわや地元である武蔵野市の野外活動センターでいろいろなゲームは学んで頭に入れていたので、久しぶりに実践しました。でもここで実践することになるとは思いも寄りませんでした。午後は折り紙千羽鶴作りを使っての広島・長崎についての平和学習、じゃんけんゲームやバナナ・マンゴー・ドリアンを使ってフルーツバスケットを実施しました。参加者の咲ちゃんとも協力してうまくまとめられるか心配でしたが、みんな素直だったのでちゃんと動いてくれてよかったです。

この日の夜はダンクんとパンダちゃん、エーさんと参加者の皆さんでパンダキャンプから程近いバンライのお祭りに足を運んでみました。屋台は日本とも似ていて懐かしい雰囲気もあれば、脂っこいこってりした料理や、絶対に中国から何か運ばれてきた日本のキャラクター模倣の景品もあったりして、いろんな意味で絶対に日本では体験できない屋台でした。

翌日からはついにパンダキャンプから更に山奥で、世界遺産にも登録されている「ファイ・カ・ケン野生自然保護区」へ、シリポンさん、若林さんと共に向かいました。私たち一行は一応研究者として入らせていただけることになり、研究者のみ宿泊できる大変きれいなロッジに1泊2日で泊めさせていただけることになりました。タイの避暑地としても有名なところでもあり、夜間の気温は夏の軽井沢を思い出すほどの涼しさでした。

ファイ・カ・ケン野生自然保護区はバンコクから西へ130km、ミャンマーとの国境地帯ともまたがる野生生物保護区群です。東南アジア随一の自然保護区域のひとつで、多種多様な動物や植物が生息しています。また、タイの野生トラの生息地でもあります。密猟の被害にも遭い数が減少しているため、厳重に保護されています。

到着後は国立公園のトップの方にお会いし、すぐに軽トラに乗車。トレッキングコースで自然観察になりました。巨大なアリ塚、巨大な竹の幹、シカの群れに圧巻になりつつも、最後に辿り着いた記念館。ここがタイの野生保護活動発祥の地とも

いわれるきっかけとなった、スーブ・ナーカサティアンの記念館でした。世界遺産に登録されるきっかけとなった人で、タイで初めて生物多様性を説いた方でもありました。記念館近くにはこの国立公園の全体ジオラマも展示されており、広大な土地に数多くの動物が生息していることが見て取れました。山奥地ではトラはもちろん、水牛、アジアゾウなども生息しておりシリポンさんは「今回は厳しくとも次回はぜひみんなを連れていきたい」と意気込んでおられました。その後、夜は若林さん待望のホタル観察へ。大変多くのホタルを観察できました。それと同時に辺りは真っ暗でトラが来ていないか周囲を確認しながらの散策でした。

翌日はレンジャーの方と朝から野生のトラが生息するコミュニティ周辺のトレッキングコースを見て回りました。トラの数日前の足跡や糞の痕跡があるも、最後まで姿を現しませんでした。途中やっぱり激辛の昼食を取りながらも、タイと隣国ミャンマーとの激戦の地を訪れ、今回の旅で一番動物を見ることの出来たスポットに辿り着きました。「塩場」です。野生生物たちが人家に近づかないように、草原に穴を掘って公園の担当者が毎朝、塩をまきに行きます。その「塩場」で動物たちは塩分補給をし、人家に近づかない、そしてそこには野生生物たちが多く集まるというわけです。その草原には見晴台があり、マクジャクや、東南アジアでよく見られるというバンテンの群れに出会いました。バンテンの群れは子連れで、食事のために草原に現れたようですが、私たちが撮影を始めると少し警戒し始めたような様子で、その後に離れてしまいましたが、貴重な野生動物との出会いでした。観察にはもちろん一眼レフカメラも使用しましたが、レンジャーの方が持ってきて下さった大きな双眼鏡にデジカメをくっつけて撮影した結果、遥か遠くにいるバンテンの群れを至近距離にいるかのような写真を撮ることができました。夜は国立公園のレンジャーさんの車に乗らせていただき、トラやゾウの群れを見に観察へ。日本では絶対に見かけないトラ注意、ゾウの群れ注意の看板がちらほら。深い森の中を駆け抜けていく闇の中に光る眼を見たときはすぐさま「ストップ！」と声かけ、遠くに見えたネマネコに感動しました。シリポンさんも興奮気味に。観察に酔いしれる日々はここで終わりました。



翌日、パンダキャンプに戻りボタンさんたちと久しぶりに再会。そこで私たちが国立公園へ出かけている間、娘さんのパンダちゃんの学校へ体験入学していた咲ちゃんが、タイの学校での出来事を語ってくれました。咲ちゃんの話聞いて、また子どもたちとふれあえる機会ができたらと思い立ち、ボタンさんに直接「できたら明日だけ、一日体験入学させて欲しい」と頼み込んだところ、ダンクんの通っているバンライウィットヤー中学校・高校に午前中だけ登校できることが決まりました。その日は興奮で眠れなかったのを今でも覚えています。翌日は、カレン族の皆さんの農業について見学させていただく予定ですが、自分だけ特別プログラム編成となりました。翌日、学校に到着し、宗教の時間後の朝の会で全校生徒と先生約1000人に向かって英語で自己紹介するというかなりチャレンジングなことをしましたが、その後は温かく生徒のみんなが迎えてくれました。久しぶりに転校生になったときの感覚を味わいました。

その後は、全部タイ語の授業で難易度が高すぎましたが、日本から持ってきた地図や、タイ語の旅行本、スマホに入れた雪とか桜の写真を見せたときはクラス中から歓声が上がりました。数学の授業は全てパワーポイントで「タイ語で因数分解ってそういうのか」、という発見があったり、中国語の授業では、唯一漢字が完璧に書ける名人として、黒板でお手本したり、日本語の授業をやってみたり、逆にタイ語のクイズを出題されたりと熱い教室の中は更に熱気に包まれました。異文化だからこそ味わえる感動というものをそこで初めて実感し、そして英語がほとんどできない自分を悔やみました。これだけ英語で世界を拓けることを知ったのは遅かったかどうかはわかりませんが、もっと地元の子どもたちや先生ともコミュニケーションを取りたいと強く思いながらも、たくさんの感動ともやもやを抱えた体験入学で、本当に刺激的でした。（次号につづく）